

松井健児

冴子

Saeko

京都芸術大学出版局

目次

晩秋の沼辺

晩鐘

美しきロスマリン

田島が原

記念祭

三溪園

インターハイ

クールベの女



美しきロスマリン

その手にはヴァイオリンが抱えられていた。

二人はじつと見つめ合った。

カラバツジヨのリユートを弾く少年、いや少女は額縁からとびだして突然新一の前に現れた。窓を少し開けて、深い限りない詩情と知性を覗かせているような眼、甘い魅力的な唇に 思わず心が惹き付けられる。

「あの林に参りましょう」 指さした方へ二人は並んで歩いた。

「冬にはお手紙ありがとうございました。どうしても ご住所を思い出せませんでしたで、失礼してしまいました」

彼は暫く間をおいてから、

「何かあったのですか」と尋ねた。

「私がヴァイオリンを持っているなんて変に思いでしょう。先生になるのを止めたの。もうすぐ音楽学校の生徒です。今、お稽古の帰りですの」

新一には、この美しい女性には先生よりヴァイオリニストのほうが似合うように思われた。

音楽家！俺は画家。何と素晴らしいカップルではないか。冴子が音楽について語ると 俺は美術を

論じる。何と幸せなことだろう。

二人は松の根本に腰を下ろした。そこからは樹幹に緑の丘辺が見渡せた。

彼は突然、快活に云った。「

「では、今日の再会を祝って何か弾いてくれませんか。」

ここまで言うと、むらむらと力が湧いてきた。たとえ冴子が俺を想ってくれなくとも、俺には永遠の友がいる。自然という偉大な友がいる。風景画家にとって自然そのものが芸術だ。冴子も自然の産物だ。即ち芸術品だ。芸術に生涯を委ねている俺にとって、芸術のためなら何事も怖いものはないのだ。

空模様も立ち直り、うらうらと長閑な風が木の芽を吹かし、鶯を誘う三月の午後である。

「とても、とても。これからですもの。来年になれば音階くらいは出来るでしょうけれど。それよりも、貴方の写生を見せて下さらないこと。」

「僕も見せるから、君から始めようよ。」

「では、弾きますわ。誰も来ない内にね。」

冴子はまだ目新しい楽器を取り出すと、少しはにかみながら弾き始めた。

頬に赤みが指してくるにつれ、次第に大胆になってきた。自分の音に酔ったように、林の中の空気を震わせた。

新一も好きなクライスラーの「美しきロスマリン」である。

慎重に楽譜を確認しながら弾いている。その素直な音色が次第に彼の心の中に沁み込んできた。それは音楽それ自体からか、それとも 弾き手なのか、たまらなく美しいと思われた。

額に汗を光らせながら、静かにヴァイオリンを下した冴子の姿そのものに 何か芸術的な気風が潜んでいるように思われた。

傍らに腰を下ろした彼女の横顔を覗いた時、崇高な詩の世界に導き、恍惚感に酔わせてくれたお礼に何をしようかと迷った。

この神聖とさえ思われた世界から現実に戻った時、新一の目の前には霊と肉とが一体となって横たわっていた。あの夕方の時よりも遥かに勝る本能の叫びをどうすることも出来なくなった。それは善でも悪でもなく、美を愛することと同一なことと信じた。

彼女の背中にそれとなく廻した手に初めて伝わる異性の血液の温かさ、その肌の柔らかさに恍惚となりながら、少女の体を引き寄せた。

二つの体はしっかりと寄り合い、心臓の鼓動を伝え合った。

新一の鼻には乙女の香りが溶け込み、目の下に紅色の唇が霞んだ。唇は触れ合い、二つの舌は絡み合った。滑らかな肉の触感に宇宙も地球も時間も一つになって回転し始めた。あたかも二つの肉体の周りを天使が飛び舞うかのごとく。

初めて味わう恍惚に全てを忘れ、知性も息の根まで吸い取られてしまふかに思われた。この天国が一刻でも長からんと望みは彼女の動作で中断された。

身を起こした冴子は 水気を帯びた口いっぱいに笑みを浮かべながら、「では、あなたの番ですね。でも 宜しかったら 私の下宿までいらっしゃいませんか？」言つた。

そこは十分とは離れていない農家の離れの一室であつた。

四畳半には白梅の香が漂い、座り机の上に楽譜と文学に本がきちんと並んでいた。

炊事用の小さな流しと七輪が目に残まつた。

「あれはルノワールですね」

壁に掛けられたポスターの洗濯女の肌の温もり、豊かな腰の曲線を眺めながら、新一は言つた。

「おなかが空いたでしょう。何か作りますね」

悲惨な第二次世界大戦が終わつてまだ三年、米穀配給手帳がなければなければ 食堂にも入れない時代である。

器用にナイフを使い、マヨネーズ和え 胡瓜入りサンドウィッチと ズルチンの香がする紅茶が用意された。

新一は新鮮な胡瓜とマヨネーズがこんあに美味しいことを知らなかった。

暖かく甘い日東紅茶も、甘味に飢えている彼には嬉しい飲み物である。

新婚生活を味わっている気さえしてきた。

二人は スケッチブックをめくりながら、戦争と父親の仕事の関係で埼玉にきてしまったこと。学生的身分で、今、何をしているか、何を志向しているかなど、とめどがなく話し合った。時たま横になり、胸を合わせ、唇と舌の運動をすることで恍惚となった。

新一には確信がある。「愛情を伴わない性行為はしてはならない。許されるのは相手が玄人の場合に限る」と。

冴子が時にみせる微かな震えや、自らは求めてこないことは、彼の理性を求めているのかもしれない。ご馳走を頂くのは適正な時まで待つべきなのだ。

時計が十一時を告げた。

新一はとうとう立ち上がり、

「もう遅くなりましたね」の言葉に促されて、最後のキスをして、闇の中にとび出した。

彼女は俺を愛してくれていたのだ。これが恋というのだろうか。何と満ち足りた一日だったことか。今度はハイキングに連れ出そう。何処にしようか、考えるだけでも血が騒ぐ思いである。俺は恋に落ちたのだ。

田島ケ原

田植えが始まったばかりの水田地帯を、道はまっ直ぐ西に向かって伸びている。まだ薄く張られたばかりの水面に春の千切れ雲が浮かんでいる。ところどころに舞い降りた白鷺が風景の中に強いアクセントを置いている。昭和二〇年三月、連夜東京を焼きに来襲していたB29がサイパン島への帰途捨てた余剰燃料タンクによって浦和市の一部が消失した。寒空の下、今歩いている地帯まで避難してきたのを思い出した。また、この辺りは、小説「嗚呼玉杯に花うけて」の主人公がよく通った道でもある。

やっと男女交際が自由になった。それでも、若いカップルが珍しいのだろう。田植えの手を休め、田植えの手を休めて、にやにやしてこちらを見ている

あの暑い八月十五日、自由主義者で戦争反対だった父が落とした涙を見て、やはり日本人なのだと実感した。「この戦争は負ける。戦争に駆り出されたら、命を無駄にせず捕虜になれ。国際法が守ってくれる」と言っていた。特高や憲兵に聞かれたら、死刑になりかねない言葉である。

やっと自由になった日の空の青さ、その中にもはや米機は現れないと知った時の喜びがよみがえってきた。しかし、日本人が他人に干渉せず本当の自由を知るのはいつのことか。

新一が通う旧制高校のトイレや寮の壁や扉は、落書きで埋められている。人生論や格言、哲人の言

葉が多い。この中に、「この戦争に反対だが、召された以上は戦ってくる」という趣旨のものが目に付く、先輩達の心の葛藤は如何ばかりだったかと偲ばれる。

新一の好きな寮歌の中に、次のような惜別の歌詞がある。

ああ人生の華と云う

げに真なるユートピア

緑の丘に甘睡せし

三年の春の遷りては

今邯鄲の夢覚めて

田島ヶ原の桜草に

尽きぬ名残を惜しみつつ

別かるる友に幸あれや

長閑な五月の一日、二人はこの田島ヶ原までハイキングをしようというのである。

新一は背筋を伸ばして真つすぐ大股で歩き出した。冴子はちよこちよこと付いてくる。手をつなごうとしたが、しまった！ 朴歯を履いているので、ちびの冴子と手の位置が合わない。おんぶしたいくらいである。幸い、人目の少ない畑に出た。

新一は突然歌いだした。

お手つないで 野道を行けば

みんなかわいい 小鳥になつて

歌を歌えば 下駄が鳴る

晴れたみ空に 下駄が鳴る

続いて冴子

花をつんでは お頭にさせば

みんなかわいい 兎になつて

はねて踊れば 靴が鳴る

晴れたみ空に 靴が鳴る

ちよつとハスキーだが、美しく可愛い声である。

戦時中是一部が畑になり、荒れていた田島が原は昔の風情を取り戻しつつあった。ゆっくり眺めるのは五年目くらいだろう。天然の桜草の花は、やや控えめな赤色をして葉の緑との対比においても

日本人に好かれている。荒川の土手まで花畑は続いている。二人はついに土手に上つた。急流が多い荒川が滔滔と流す大量の水も、二人には春の長閑な流れである。蓮華が咲いている。

ランチには、とろろ昆布で包んだおにぎり、南瓜、鯨のベーコン。大ご馳走である。

大きく蛇行しながら流れ来る大河の源・秩父の山々が霞んで見える。新一は、諸井三郎作曲の美しい寮歌を思い出した。

春の調べのときめきに
微笑む花を積みおきて

夢にまどろむ佐保姫の
玉の輿来ぬ揺沙原

はなだの空に揚雲雀
燎爛の野に舞う胡蝶

こころゆたけき若人は
花を褥の草枕

草に五月の香せば
胸の緒琴は高鳴りて

真紅に燃ゆる想いあり

嗚呼此の野辺に並び立つ
若き心の憩屋は

春永遠の国なれや
春永遠の国なれや

突然、新一は立ち上がり、背筋を伸ばして、大声で歌い始めた。

緑の丘邊麦の野に
春は還りぬ一年と

ゆたかに匂う思いでの
花は美睡に伏してけり

廣茫遙けし武蔵野に
紅き花咲き又散りて

若き心の野に萌ゆる
うら若草は茂みけり

日は沈めど野に立ちて

秩父の脈に眺め入る

あゝ若人に血は燃えど

憶は長し夢はるか

冴子はいつの間にか蓮華の花をベレー帽に飾り、ご満悦の様子である。二人はまさに青春の真つただ中にいた。新一はふと、僅か三年前の悲惨な事件を思い出した。大宮の国鉄工機部に動員されてた折、米艦載機の機銃掃射を受け、防空壕に避難したが、ヒューヒューと凄まじい音をたてながら迫ってくる着弾の音に、これで世の終わりと覚悟した。一瞬、音が僅かに逸れ、助かったのである。この直後、荒川堤の近くで農作業中の女学生3人が掃射を受け、即死したのである。米兵はゲーム感覚で、地上の動くものを全て標的にしていた。お互いの顔も見え、目さえ合わせられる距離から殺すことが出来、それが任務であり、名誉であり、快楽ですらある時代を二度と招いてはならないと、新一はしみじみ思う。